

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02435

研究課題名(和文) 近世後期俳諧と地域文化

研究課題名(英文) Late Edo Period Haikai Poetry and Local Culture

研究代表者

大石 房子(金田房子)(OISHI(KANATA), Fusako)

清泉女子大学・付置研究所・客員所員

研究者番号：80746462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：江戸後期は、俳諧が社交・教育の手段として広く行き渡り、地域の文化活動に重要な位置を占めた時代であるが、作品の評価は低く未調査の部分が多い。

本研究では、天保(1830-44)の三大家の一人鳳朗と一茶という二人の職業俳諧師を軸に、地方俳人との交流に着目し、俳書・書簡・句稿といった資料を詳細に読み込むことで、後期俳諧の具体相を捉えた。これによって、鳳朗の生涯や一茶との交流等が次第に明らかとなり、鳳朗の門人指導の実態や地方の文化人の俳諧への熱意を知ることができた。さらに鳳朗の句集や紀行文を翻刻紹介し、近世後期俳諧の作品評価の再検討を行った。これらの成果を、寄稿論文を加えた論集として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世後期は俳諧が浸透し人々の生活に密接に関わった時代であったが、文学的には低調な「月並」調と切り捨てられ研究の空白期となっていた。地域文化に大きな役割を果たした俳諧の活発な営みと特色を、高崎の一之(神官)・魚沼の二川(富農)らに関わる豊富な資料を読み込み紹介した。また彼らを指導した職業俳諧師・鳳朗について、年譜の作成・句集や紀行文の翻刻紹介を通して作品の特質を考察、門人指導のあり方や一茶との交流を具体的に明らかにした。

以上の成果は順次紀要等に発表するとともに一般にも手に取りやすい選書の形で、金田・玉城共編『鳳朗と一茶、その時代 - 近世後期俳諧と地域文化 - 』(新典社選書100)として刊行した。

研究成果の概要(英文)：In the late Edo period, haikai poetry played an important role in extensive communities, but they were not highly rated and analyses of works have not been conducted. In this study, we focused on two professional haikai masters: Horo, one of the three great poets of the Tempo era (1834-44), and Issa, as well as their interaction with haiku poets from local areas. Our research methods centered on a thorough investigation of materials such as haikai poetry books, letters and poetry drafts, and we scrutinized these resources in an effort to grasp the specific aspects of haikai poetry from the period. As a result, we began to learn more about the life of Horo, his interactions with Issa or his disciples, and other details as well as the extraordinary zeal for haikai poetry of local cultural figures. In addition, we reprinted Horo's poetry collection and travelogue, reevaluated several haikai works from the late Edo period and published collection of papers with all the results from them.

研究分野：日本近世俳諧

キーワード：鳳朗(対竹・鶯笠) 一茶 近世後期俳諧 地域文化

1. 研究開始当初の背景

江戸時代後期、都市部でも農村でも、人々は日常の中で現実を離れた風雅の世界に心を遊ばせることを好んだ。中でも裾野の人々まで取り組んで津々浦々までの広がりを見せたのが俳諧である。俳諧が文化的交流(社交)の手段として広く行き渡り、かつ庶民教育にも用いられたことはよく知られているが、その具体相については未調査の部分が多い。また作品についても、子規によって「月並」調と批判されて以来、文学的価値が認められてこなかった。

この時代を代表する俳人・一茶(1763-1827)は、全集も備わって十分に研究がなされているかのようであるが、ここ四半世紀にわたって一茶研究を主たる対象とする研究者はほとんどなく、既知の作品の鑑賞にとどまっており、各地を行脚した俳諧師としての活動は忘れられがちである。一茶とも交流のあった天保の三大家の一人鳳朗(1762-1845)は、諸国を行脚して旺盛な俳諧活動を展開し、晩年には京都の二条家から花本宗匠という「地位」を得て、同時代的には一茶をはるかに凌ぐ影響力を持ちつつも、ほとんど研究されてこなかった。理由としては、従来の俳諧史観でマイナス評価され、俗なものとして切り捨てられたことが大きい。その伝記は昭和30年代の頼原退蔵・中村俊定による小伝があるにとどまり、熊本藩士だった彼が武士を捨て全国各地を行脚し、江戸に居を定め高名な俳諧師として多くの門人を擁するまでに至るプロセスや、宗匠としての活動の実態も明らかにされてこなかった。

鳳朗らが指導した在村の俳人は、それぞれの地域で自らの門人を持つなど、地域の多彩な文化的活動を担った。しかしそうした地方俳人の研究は、ほとんど一時代前の郷土史家に委ねられたままに終わっており、その後の発展は乏しく、歴史研究者杉仁氏による在村文化の研究(『近世の地域と在村文化 - 技術と商品と風雅の交流』吉川弘文館・2001・『近世の在村文化と書物出版』同・2009)加藤定彦氏による『関東俳諧叢書』(関東俳諧叢書刊行会・1994 - 2009)『関東俳壇史叢稿 庶民文芸のネットワーク』(若草書房・2013)などの一連の業績にとどまると言える。また、地方俳人の資料として俳書の他に日記も残されているが、これらの内容の調査は、ほとんど手つかずだと言っても過言ではないだろう。

2. 研究の目的

当時の庶民の文化活動の様相を知る上で、俳諧という切り口はとても有効である。しかしながら、膨大に残る後期俳諧の資料は、例えば句稿などは見た目には反故紙に近く、ほとんどが無名の人々による作品であるため重要視されず、散逸の瀬戸際にあると言ってよい。文書館等に保管されたものも、大部分が未調査の状態である。これらの資料に見られる無名の俳諧作者達、そしてそれに関わった中央の宗匠達の活動から、これまで知られていない当時の時代相や文化活動、また生き生きとした俳諧の営みや作品のありようを浮かび上がらせてゆくことが目的である。

今現在、かろうじてこうした資料が残されている間に、調査し光をあてることの重要性をひしひしと感じている。これらは俳諧を通じて互いに交流を深め、あるいは独り癒しの時間を持った先人達の心の記録でもあり、現代の俳句流行に文化的につなげるものと考えからである。

後期俳諧全体を対象とするのは不可能なので、本科研では鳳朗と一茶を軸とし、北関東から越後地方の門人との交流を対象とすることとした。具体的には、大別して次の三点となる。

- (1) 地方の文化人に大きな影響を及ぼした鳳朗について、活動の実態を年譜的に明らかにし、人々に評価されていた作風の特徴を理解する。
- (2) 鳳朗と一茶の関わり、また、同時代の地域文化の様相を知る。
- (3) 地方の文化人の日記を解読し、地域文化の具体像を探る。

資料を読むにあたっては、概観するのではなく断片的ではあってもじっくり読み込んで意義を理解してゆくことで後期俳諧の特徴を捉えることを心がけた。これらの成果を順次紀要等に発表してゆくとともに、最終的に、関東以外の各地を対象とした論や歴史分野の専門家の論の寄稿を依頼して、後期俳諧の広がりも視野に入れた論集の刊行を目標とした。

3. 研究の方法

上記(1)～(3)の目的の達成のために、次のような作業・調査・研究会を行った。

(1)

鳳朗伝記の事項や作品に関する調査は、主に研究代表者の金田(大石)が担当した。

方法としては、最も多くの俳書を所蔵する天理大学附属天理図書館綿屋文庫を私費も含め6回にわたって訪問。他に岡山県立図書館燕々文庫・石川県立図書館月明文庫などの俳書、国文学研究資料館の紙焼・マイクロフィルムの閲覧、及び同館新日本古典籍総合データベースや早稲田

大学図書館古典籍総合データベースのデジタル資料を活用し、鳳朗が生きた時代の俳書を可能な限り多く調べることによって事績を追った。これによって、「対竹」から「鶯笠」・「鶯笠」から「鳳朗」への改号の時期、江戸へ移住の時期、交遊範囲、作風の変化などが明らかとなった。また、矢口丹波記念文庫（群馬県高崎市）蔵の一之の句稿に鳳朗が添削したものを対象として、門人の指導のあり方やそこに見られる俳諧観を考察した。矢口一之は上州八幡八幡宮の神主で、同八幡宮の境内には芭蕉百五十回忌に際して鳳朗の揮毫による芭蕉句碑が建立されている。一之は俳諧に熱心であるとともに寺子屋宗匠として地域の文化活動を担った。鳳朗の門人永久から一之に宛てた書簡が八通残り、これらから晩年の鳳朗の姿を垣間見ることができる。

こうした調査の一方で、鳳朗の句集や紀行文などを翻刻、略注を付しながら読み進める作業を行った。京都大学文学研究科図書館頼原文庫蔵の写本『鳳朗句集』（天保9年 1838 跋）は、鳳朗の生前にまとめられたもので鳳朗自身が校合している。評価を示す印が付されており、幕末の俳風の目指したものを知らることができる点でも貴重な資料である。

（2）

鳳朗と一茶の関わりを知るために、分担者玉城司所蔵の鶯笠（鳳朗）書簡の解読を行った。一茶は鶯笠の俳論書『芭蕉葉ぶね』（文化14年 1817 刊）の校合者であるが、これまで名前を貸しただけと考えられてきた。本書簡は、一茶の指摘が生かされずに誤ったまま刊行されたことを詫言ったもので、実際に一茶が関与していたことがわかり、同書の版本をすべて調べると訂正して添え書きを付したものが確認できた。また『一茶全集』の日記等の記載から両者の関わりを抽出した。さらに玉城は「一茶同座連句一覧」の作成を進めており、平行して行っている真田家の大名俳諧の研究と関連づけて身分を越えた地域文化の視座を提供した。

北関東から越後地方の俳諧に関わる資料を探すため、若手メンバーの研究協力者紅林健志・時田紗緒里を含め四人で、群馬県立文書館・新潟県立文書館を訪問、資料を撮影した。玉城所蔵の礪亭文庫（長野市）も訪問、同文庫の鳳朗に関する豊富な資料については論文で紹介した。中でも、鳳朗と交流のあった越後魚沼の増田二川に関わるまとまった資料は貴重で、二川に宛てた鳳朗を含む職業俳諧師の書簡は、中央の宗匠の果たした役割について生の情報を伝えてくれるものである。さらに天保の三大家のもう一人・梅室を研究されている大西紀夫氏所蔵の貴重な俳書や一枚刷りコレクションを見せていただく機会をもつことができた。

さらに、視野を広げるため、研究年度1年目・2年目には歴史分野の専門家（山崎和真氏・和田健一氏）4年目には韓国の俳諧研究者（兪玉姫氏）を講師として招いて公開して研究会を開き、レクチュアを受けた。3年目の研究会は、中間報告会と位置づけてメンバーそれぞれが発表し、活発な意見交換を行った。

（3）

矢口丹波記念文庫蔵『矢口家丹波正日記』を対象とし、同日記を読む会を開いて、全員で解読を進めた。

4. 研究成果

上記の調査の成果は、まず紀要や研究誌に発表した。こうした既発表のものに新稿を加え、金田房子・玉城司編『鳳朗と一茶、その時代 - 近世後期俳諧と地域文化 - 』（新典社選書 100・2021年）として刊行した。「研究の目的」にも述べたように、近世後期の大阪・伊予・金沢の俳人に関する研究をされている方や講演を依頼した方に寄稿を依頼し、各地で盛んであった近世後期俳諧の広がりの様相がうかがえるように企図した。

内容は、次のごとくである。

【論考】

- 金田房子「序論 近世後期俳諧と地域文化」
- 山崎和真「近世地域社会における俳諧の受容と展開 地域文化と俳諧」
- 玉城 司「一茶と同時代の地域文化 身分を越える地域文化 付録・一茶連句一覧表」
- 金田房子「一之と鳳朗 地域文化に貢献した神主」
- 大西紀夫「梅室と加賀藩の俳壇 加賀蕉門の継承」
- 松井 忍「伊予俳人たちと鳳朗 樗堂と遊俳たちの地域文化」
- 金子俊之「松井三津人覚書 鳳朗・一茶に並んだ大坂俳人」
- 金子はな「一茶と惟然 無邪気の系譜」

【資料と考証】

- 玉城・金田「文化十四年一茶宛鶯笠（鳳朗）書簡」
- 金田「越後魚沼の二川宛鶯笠（鳳朗）書簡」
- 金田「鳳朗略年譜」
- 金田「写本『鳳朗句集』翻刻」
- 金田「鳳朗著『続礪浪山集続有磯海集』（上）翻刻と略注」

【コラム】

- 和田健一「上州の句碑・柳居」

和田「上州の句碑・鳥酔」
金田「菓子料」
玉城「新潟県立文書館蔵「二条家俳諧」摺物紹介」
玉城「鳳朗 天保十五年「あれ見よと」句文」
紅林健志「群馬県立文書館蔵『素輪句集』について」
時田紗緒里「只野真葛と女子教育」

論集所収のもの以外に、「研究の方法」にあげた(2)～(3)について、次のような成果を
発表した。

(2)

群馬県立文書館の調査で撮影した、建部涼袋(綾足)の門人で前橋の富商松井素輪の日記『素輪
日記』及び句帖を検討し、涼袋と素輪の交流や素輪の俳諧活動について紅林が口頭発表及び論文
を発表。

(3)

解読した日記内容の中から、地方演劇に関わる具体的な記録を抽出して考察を付し、演劇に関わ
る御触書の写しの重要性にも注目して時田が論文を発表。

現在も玉城と金田が Skype やメールによって、協力して二川宛書簡の解読と翻刻紹介を継続
している。近世後期俳諧の資料は膨大であるが、今後も一つ一つ資料を丁寧に読んでゆきたいと
考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 玉城司	4. 巻 140
2. 論文標題 桃青号と風羅坊号について - 加藤定彦氏「北村季吟展の桃青 - 風羅坊から風羅坊へ -」をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 連歌俳諧研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 玉城司	4. 巻 なし
2. 論文標題 文珠堂縁起	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 川俣従道編『鬼無里 土倉文珠堂』（信濃毎日新聞社）	6. 最初と最後の頁 26-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 玉城司	4. 巻 なし
2. 論文標題 奉納額を読み解く	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 川俣従道編『鬼無里 土倉文珠堂』（信濃毎日新聞社）	6. 最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 時田紗緒里	4. 巻 27
2. 論文標題 近世の地方における芸能活動 『矢口家丹波正日記』から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本女子大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金田房子	4. 巻 53
2. 論文標題 「対竹」号の鳳朗	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 俳文学報 会報大阪俳文学研究会	6. 最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉城司・金田房子	4. 巻 97
2. 論文標題 世の取沙汰、あまり野卑にてー文化十四年ー茶宛鶯笠 (鳳朗) 書簡の考察ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世文芸 研究と評論	6. 最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田房子	4. 巻 52
2. 論文標題 最晩年の鳳朗 - 一シ宛吉田永久書簡から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 俳文学報 会報大阪俳文学研究会	6. 最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田房子・玉城司	4. 巻 40
2. 論文標題 礫亭文庫蔵鳳朗関係資料紹介 - 越後俳人二川との交流など	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 清泉女子大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 紅林健志	4. 巻 8
2. 論文標題 素輪『小遣銭』にみる綾足の批点 - 旧室・麦浪との比較を通して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 108 - 123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 玉城司	4. 巻 8月号
2. 論文標題 小林一茶の漂泊とその作品	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊俳句界	6. 最初と最後の頁 102 - 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田房子	4. 巻 51
2. 論文標題 鳳朗の添削 - 矢口丹波記念文庫資料から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 俳文学報 会報大阪俳文学研究会	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金田房子	4. 巻 134
2. 論文標題 『鹿島詣』考 - 仏頂和尚への応答として -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 連歌俳諧研究	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金田房子	4. 巻 38
2. 論文標題 上毛の俳諧宗匠・矢口一之をめぐる人々―春秋庵―門と和算家―	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 清泉女子大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 玉城司	4. 巻 804
2. 論文標題 「文化4年の一茶と川中島―『文化句帖』から」(川中島俳諧研究会 川中島公民館) 講演録	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 みすゞ	6. 最初と最後の頁 48-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉城司	4. 巻 805
2. 論文標題 「加賀の千代尼から信濃の一茶まで」(一茶講座 一茶記念館) 講演録	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 みすゞ	6. 最初と最後の頁 47-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉城司	4. 巻 806
2. 論文標題 「一茶と同時代の俳人」(アイパル [駒ヶ根市東町]) 講演録	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 みすゞ	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 玉城司・金田房子	4. 巻 101
2. 論文標題 越後魚沼の二川宛書簡(1) 道彦・蒼キユウ(キユウはUnicode866c)・梅室書簡	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近世文藝 研究と評論	6. 最初と最後の頁 70-80
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計13件(うち招待講演 11件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 金田房子
2. 発表標題 礪亭文庫蔵鳳朗関係資料紹介 - 越後俳人二川との交流など -
3. 学会等名 人文科学研究所研究懇話会(清泉女子大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 一茶の俳文を読む
3. 学会等名 長野市立図書館講座(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 一茶と川中島
3. 学会等名 長野市川中島公民館講座(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紅林健志
2. 発表標題 松井家旧蔵文書から見る涼袋と素輪
3. 学会等名 俳文学会東京研究例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 戦場からの手紙 真田丸余興
3. 学会等名 富山市民講座開校式（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 一茶と同時代の俳人
3. 学会等名 長野市長沼公民館講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 一茶の俳文を読む
3. 学会等名 長野市立図書館講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 知られざる川中島の名句
3. 学会等名 長野市川中島公民館講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金田房子
2. 発表標題 『おくのほそ道』日光の章と山岳信仰
3. 学会等名 おおがき芭蕉大学（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 金田房子
2. 発表標題 庶民の文芸としての俳諧、そして一茶へ
3. 学会等名 四川外国語大学日本古典文学講座（於：重慶）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 加賀の千代尼から信濃の一茶まで
3. 学会等名 一茶講座（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 一茶と同時代の俳人
3. 学会等名 「みすず」800号記念俳句大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 玉城司
2. 発表標題 美濃派俳人の旅～芭蕉と支考の系譜
3. 学会等名 奥の細道むすびの地記念館第3 1回企画展関連講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金田房子・玉城司編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新典社	5. 総ページ数 375
3. 書名 鳳朗と一茶、その時代 ー近世後期俳諧と地域文化ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	玉城 司 (TAMAKI Tsukasa) (20410441)	清泉女子大学・付置研究所・客員所員 (32632)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	紅林 健志 (KUREBAYASHI Takeshi)		
研究協力者	時田 紗緒里 (TOKITA Saori)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関